

市場小学校の桜

市場

胸にある桜

本年度中の完成に向けて、着々と工事が進められている市場小の新校舎。グラウンドを含めた正門から体育館にかけての帯に、クリーム色の明るい校舎が姿を現しています。しかし、三月にここを巣立つていく六年生は、残念ながら新しい校舎で過ごすことはできません。正門から校舎へとつながっていた校も工事のために姿を消しました。もうすぐ、思い出のつまった校舎に別れを告げなければなりません。



彦山川横の県道を直方方面に進むと左手に見える市場小、新校舎にも桜が植樹される予定。

二月十六日、六年一組
〔担任・高瀬大輔先生〕

の「総合的な学習の時間」では、四十人の児童が「思い出の学習の風景」について考えました。子どもたちには、今はない桜の姿が強く胸に焼き付いていました。

「入学式で桜と一緒に写真を撮りました。その桜のあとにいま新しい校舎が建っています。もう一度だけ、あの桜がみてみたい」と藤田未希さん（赤池・赤池団地）。

有吉美樹さん（赤池・生力NT）は「今思えば不思議ですが、入学したときはこの校舎もなぜか新しく感じました。桜はもうないけれど、入学式で咲いていた桜を思い浮かべながら卒業したいです」と校舎をあとにする心境を語りました。「桜を見ると、入学したころのように」勉

薦田未希さん
有吉美樹さん
木下貴文くん
上村めいさん



日に小学校生活最後の日をむかえます。

福智町内八つの小中学校では、別れと出会いの桜をリレーするように、卒業式と入学式が開かれます。子どもたちは、新しいステージで人と桜に出会い、また一歩、人生の大きな階段を上っていきます。

強するぞ」という意欲

がわいてきます」と桜の印象を語った木下貴文くん（赤池・生力NT）。

上村めいさん（赤池・高尾）は「ここにまた桜が植えられて、それがきれいな花を咲かせたらいいな。新しい桜が新しい校舎と一緒に、みんなの思い出になって欲しい」と生まれ変わる学校への期待を込めました。現校舎最後の卒業生となる八十人の子どもたちは、それぞれの思いを胸に抱きながら、三月十六

→本年度、最後の卒業生を送り出すこととなる現在の市場小校舎。桜と現校舎の風景はもう見ることができない。



赤池駅前公園の桜

赤池

東真須美さん

節目を彩る桜

「この道沿いに顔をのぞかせる駅の桜がとてもキレイなんです」。赤池駅につながる自宅前の道から、登校するわが子を毎朝見守ってきた東真須美さん（赤池・車道。社会人となった長男の洋平さん、長女の彩香さんは数年前に家を離れましたが、今朝も次男の亮介君（赤池中二年）の後ろ姿に優しく手を振りました。三人の子が進学した節目には、この桜を背景に、通学初日の後ろ姿をカメラに納めてきました。今までに撮った十枚の写真は東さんの宝物。福岡県庁に勤める彩香さんも「おかげで毎朝、安心して通学できました」と母への感謝を口にします。



赤池炭坑時代のメイン通り位置する赤池駅。正面に広がる公園を囲むように桜が咲き誇る。



「ここは北風の通り道。冷たい風が吹き抜けますが、その分、春の訪れには桜がより鮮やかに感じられます。駅で見送り、出迎えてくれる桜があるって、すてきですね」と東さん。女流書家として「彩雲」の雅号で知られ、習字塾「彩の会」を開く東さんは、塾に通う子がこの桜の下で無邪気に遊ぶ姿に、幼かったわが子との情景を重ねます。およそ、十年前には、夫賢司さんが大阪に単身赴任した時期もありました。九年間毎日手紙を書き続けた東さんは、駅前に咲いた花に思いを込め、押し花にして送ったこともあります。切ないときも心華やくときも、東さんと家族の人生の節目を見つめてきた駅前の桜。ここに広がる桜は、これからもたくさんの人々の節目を彩り続けていきます。

童謡の町をイメージした駅舎前（ページ上）を鮮やかに彩る桜。散り際には公園全体がピンクの花びらで覆われていく。

